

寺田遺跡（第3次）発掘調査報告

～度会郡玉城町佐田～

2020（令和2）年8月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1. 本書は、平成30年度に実施した県営かんがい排水事業（田丸地区）の発掘調査報告書である。
2. 調査地は、三重県度会郡玉城町佐田に所在する。
3. 本遺跡の調査は、三重県教育委員会が三重県農林水産部から依頼を受けて実施した。
4. 調査および整理は、次の体制により実施した。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター　調査研究1課　中川明・倉野雅文
調査期間	平成30年11月12日～平成30年11月16日
調査面積	寺田遺跡 98.4m ²
5. 当報告書の作成事務は、三重県埋蔵文化財センター調査研究1課が担当し、本書の執筆・編集・写真撮影は倉野雅文が行った。
6. 調査図面・写真・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。

凡　　例

1. 本書では、国土地理院発行の1:25,000地形図「松阪」「国東山」「伊勢」「明野」、三重県共有デジタル地図などの地図類を用いている。なお、三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合管理者の承認を得て使用している（令和2年4月1日付け、三総合地第2号）。
2. 本書で用いた座標は世界測地系に基づくものである。方位は第IV座標系の座標北で示した。
3. 標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。
4. 本書で用いた遺構略号は以下のとおりである。

S D : 溝　　Pit : 小穴
5. 土色の表記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社、1967年初版）に掲った。遺物観察表における土器の色調表記もこれに従う。
6. 遺物実測図の縮尺は1:4とした。
7. 註は各章の文末に付し、参考文献も註に記した。
8. 遺物観察表の凡例は以下のとおりである。
 - ・実測番号は当センター所蔵の遺物実測番号である。
 - ・色調は標準土色帖の色名を記す。
 - ・胎土の緻密さは、粗・やや粗・やや密・密の4段階である。
 - ・焼成状態は、不良・やや不良・やや良・良の4段階である。
9. 写真図版中の遺物に付した番号は、各遺物の報告番号と対応する。遺物写真は縮尺不同である。

目 次

例言・凡例	i
目 次	ii
I 前言	1
1 調査の経緯と経過	
2 調査の方法	
II 位置と環境	2
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
III 遺構	5
1 調査概要と基本層序	
2 遺構	
IV 遺構	8
V 結語	9
1 遺跡の状況	
2 弥生土器について	

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3	第4図 調査区土層断面図	7
第2図 調査区位置図	4	第5図 出土遺物実測図	8
第3図 調査区平面図	6		

挿図目次

第1表 遺構一覧表	5	第2表 出土遺物観察表	9
-----------------	---	-------------------	---

写真図版

写真図版1 (調査区)	10	写真図版3 (遺物)	12
写真図版2 (遺構)	11		

I 前 言

1 経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

本書は三重県農林水産部、伊勢農林水産事務所が実施する、県営かんがい排水工事に先立つ発掘調査である。H29年度の事業部局と担当者による協議を行った結果、工事により滅失する遺跡対象範囲に該当することが明らかとなった。このため平成30年度に確認調査を三重県埋蔵文化財センターが担当し実施することになった。平成30年10月に現地の状況把握を兼ねて、該当範囲において、確認調査を行った。掘削坑を7地点設定し調査を実施した結果、中世ないしは近世の遺構が分布していることが明らかとなつた。この結果をもとに再度、協議を行ったところ本調査を年度内に実施することになった。

(2) 既往の調査

寺田遺跡の発掘調査は、これまでに2度行われている。第1次調査は経営体育成基盤事業（宇田地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査で、平成21年に実施された。第1次調査では遺跡の西部、約130m²の調査を実施し、根石や平安時代末の土師器を伴う柱穴が確認されたほか、層位的により新しい形成時期と考えられる構が確認されている。

第2次調査も第1次調査と同様、経営体育成基盤事業（宇田地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査で、平成22年に実施された。第2次調査では遺跡の北部から中央部にかけて675m²の調査を実施した。平安時代～中世の溝が10箇所程で確認され、古代～中世の土坑も2箇所で確認されている。また、遺物についても弥生時代後期の土器片、土師器、須恵器、山茶碗、灰釉陶器、白磁など多数の遺物が出土している。

(3) 調査の経過

現地における本調査は平成30年11月12日から11月16日までの5日間である。延長距離は98.4mである。表土は重機で、遺構面は人力による掘削を行った。なお、各日ごとで埋戻しを行っている。以下に調査日誌（抄）を記す。

調査日誌（抄）

[平成30（2018）年]

11月12日 調査区設定、全体を1区に設定。

北西端（老人保健施設）から幅1m、延長13mを掘削。層位を確認。1層：アスファルトおよび碎石。2層：黒褐色粘質土。3層：暗褐色粘質土。4層：褐色粘質土。以下は明黄褐色土（疊多く混じる）が堆積。4層が遺構検出面。埋戻し。

11月13日 確認地点（No. 4）から延長18.7mを掘削。SD1（中世土器）を検出。埋戻し。

11月14日 SD1を連続して検出。下水道敷設による擾乱顕著。SD2（中世）、SD3（中世）検出。延長18.8m掘削。下水道管理設による擾乱あり。埋戻し。

11月15日 SD5検出（南北方向）。弥生土器出土。Pt確認。16m掘削。埋戻し。

11月16日 下水道管理設による擾乱が顕著。確認No. 4のSDを再検出。土器未確認。16m掘削。

図面整理。調査地点のレベル確認。調査終了。埋戻し。

2 調査の方法

(1) 調査区の設定

調査区は、事前に確認調査で設定した掘削坑を利用し、幅1m、延長100mの調査区を1区と設定し呼称した。そのため、従来のアルファベットと数字で組み合わせたグリッド法は使用しなかつた。

(2) 遺構掘削

表土（町道）直下の遺構面は、人力で掘削し、各日ともに記録作業終了後は埋戻しを実施している。

(3) 記録保存

遺構実測は手測りにより実施し、1/40の土層断面図、遺構平面図を作成し、最終的に1/100の図面に集約した。また、土層断面図は、遺構が北側と南側で検出されたこともあり、調査日によって北壁お

より南壁の層序の把握を行った。

遺構写真に関して、調査区全景や個別遺構についてはコンパクトデジタルカメラ(OLYMPUS)を使用し、記録写真撮影を行った。遺物写真は、ニコンD800Eを使用した。

遺構図面、画像データ及び遺構カード等の記録類一式は、当センターで保管している。

(4) 出土遺物の整理

出土遺物は、遺構・層位の区別を行い、遺構単位で取りあげた。整理作業終了後は、報告書掲載遺物と未掲載遺物(B遺物)に区分して各保管収蔵庫へ収納した。

(5) 文化財保護法にかかる法的措置

事業にかかる埋蔵文化財の文化財保護法等に關係する法的措置は、下記のとおりである。

○文化財保護法第94条に基づく県埋蔵文化財保護条例第48条第1項「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」(県教育委員会教育長あて三重県知事通知)

・平成30年7月27日付け 勢農第3204号

○文化財保護法第99条第1項(県教育委員会教育長あて埋蔵文化財センター所長通知) 工事立会のため発出なし。

○文化財保護法第100条第2項「埋蔵文化財の発見・認定について」(伊勢警察署長あて県教育委員会教育長通知)

・令和2年3月13日付け 教委第12-4422号

II 位置と環境

1 地理的環境

寺田遺跡は、三重県度会郡玉城町佐田字寺田に所在している(第1図)。大きく見れば宮川下流域の北西岸部にあり、肥沃な水田地帯である。地形的にみると、遺跡の北方を大仏山丘陵、西方を玉城丘陵で囲まれ、南東には外城田川が流れている。北・西部を丘陵、南・東部を河川で囲まれた当地は、標高15m前後の平坦で広い平地となっている。当地にこのような平地を形成するような河川は現在見られないと、外城田川は江戸時代に流路の付け替えが実施されたとされている。この地域の平地は、外城田川の流れに伴って基礎が形成されたと考えられる。

2 歴史的環境

当遺跡の名称は、当初は「ナゴサ遺跡」としていたが、現在は小字名から「寺田遺跡」と改称している。ここでは当地の歴史的環境を、この地域の状況を中心概観する。

a 旧石器時代・縄文時代

大仏山丘陵の近隣では、旧石器時代の遺跡が集中している。数百点ものナイフ形石器が出土しているカリコ遺跡や、神子柴形石斧や早期の土器が出土した上村池A遺跡などがある。縄文時代前期から中期

にかけての遺跡数は少ないが、後期になると金剛坂遺跡を筆頭に再び遺跡が多くなっている。

b 弥生時代

弥生時代前期では、この地域にはほど近い櫛田川下流域が、いわゆる「垂流遠賀川式」土器が數多く分布する地域として特筆できる。前期後半から後期に至る遺跡として、金剛坂遺跡や斎宮跡(古里遺跡)などがあり、櫛田川沿いの低段丘上に継続的な集落が営まれていたと考えられる。

今回の寺田遺跡の調査では、弥生時代中期後葉から後期の土器が出土したことから、この地にも集落遺跡が展開している可能性が高い。

c 古墳時代

平成2年、田丸小学校新校舎建設にあたって玉城町教育委員会が試掘調査を実施した。試掘調査の際には、頂径2.3cm、底径4.4cm、孔径0.8cm、高さ1.0cm、重量25.97gの滑石製紡錘車が出土している。側面には放射状の線刻が施されており、6世紀前半のものと思われる。この調査では古墳時代の明確な遺構は確認されていないが、付近に古墳、あるいは古墳時代の集落が存在していた可能性が考えられる。また、玉城丘陵を中心に、500基を超える古墳が造営されている。そのほとんどは後期古墳であり、寺田遺跡の東方、田丸道遺跡内南西部に位置する塚田



- | | | | | |
|------------|------------|---------------|-----------|-------------|
| 1. 寺田遺跡 | 12. 門前里中遺跡 | 23. 岩出城跡 | 34. 中須遺跡 | 45. 罷宮院跡遺跡 |
| 2. 田丸道遺跡 | 13. 坂本里前遺跡 | 24. との山・7ヶ所遺跡 | 35. 川端西遺跡 | 46. ママ田遺跡 |
| 3. 田丸城跡 | 14. 世古里中遺跡 | 25. 上黒上遺跡 | 36. 中郷遺跡 | 47. 田垣外出雲遺跡 |
| 4. 南浦遺跡 | 15. 近間坂内遺跡 | 26. 小社遺跡 | 37. 一軒屋遺跡 | 48. 桜田遺跡 |
| 5. 上町遺跡 | 16. 湯田西浦遺跡 | 27. 上卯起遺跡 | 38. 石名畠遺跡 | 49. 大藪遺跡 |
| 6. 天神山城跡 | 17. 大仏山古墳群 | 28. 富岡里浦遺跡 | 39. 奥の浦遺跡 | 50. うるし原遺跡 |
| 7. 高垣内遺跡 | 18. 山神城跡 | 29. 中榮山遺跡 | 40. 上油遺跡 | 51. 佐田山古墳群 |
| 8. 西街道遺跡 | 19. 久野遺跡 | 30. 汗谷川東遺跡 | 41. 下中野遺跡 | 52. カリコ遺跡 |
| 9. 西世古遺跡 | 20. 大池遺跡 | 31. 聖野南遺跡 | 42. 一軒屋遺跡 | 53. 西垣内遺跡 |
| 10. 師子焼遺跡 | 21. 楠ノ木遺跡 | 32. 聖野北遺跡 | 43. 野垣外遺跡 | 54. 上村池A遺跡 |
| 11. 坂ノ垣内遺跡 | 22. 上の山遺跡 | 33. 聖野東遺跡 | 44. 拼桶遺跡 | 55. 金剛坂遺跡 |

第1図 遺跡位置図（国土地理院『松阪』『国東山』『伊勢』『明野』1:25,000）

古墳群はこの時期のものである。また、塚田古墳群の南方に位置する佐田山3号墳からは7世紀代と考えられる銅鏡が出土している。銅鏡の出土は珍しく、当時この地域にはかなりの有力者が存在したものと考えられる。

d 古代～中世

奈良・平安時代の特徴として、この地域の近隣では土器焼成遺構が多数確認されている。土器生産に関しては、中世・近世においてもこの地域で盛んであった。平成4年度に実施した、当遺跡の北方に位置する西垣内遺跡の発掘調査では、近隣の集落遺跡からは出土していない特殊器形が数多く確認されている。

e 近世以降

江戸時代には、紀州藩田丸領の中心として田丸城が位置づけられ、城代が置かれた。田丸は伊勢參宮街道と熊野街道との分岐点であり、交通の要衝とし

て機能していた。明治期以降も田丸の盛行は続き、明治22年に町村制が施行されると、外宮膝下の山田町とともに、いち早く「田丸町」として町制を施している。

[参考文献]

- ・三重県蔵文化財センター『平成21～23年度県営農業基盤整備事業地域（伊勢管内）埋蔵文化財発掘調査報告』2013所収、寺田遺跡（第1・2次）、西垣内遺跡（第2次）
- ・玉城町史編さん委員会『玉城町史』1995



第2図 調査区位置図（1:5,000）

III 遺構

1 調査概要と基本層序

(1) 調査概要

第3次調査は遺跡の南東部において、幅1m、延長98.4mの範囲で行った。地域の生活道路であり、住宅に面する道路上が調査箇所ということもあり、近隣住民への配慮をおこない、一日の調査箇所は、その日のうちに埋め戻す調査方法を実施した。そのため、十分に確認できなかった部分もあったが、今回の調査区では遺物が確認された溝5条、ピット2基を確認した。また、遺物の中にはこれまでの調査では確認されなかつた、弥生時代中期後葉の土器を確認することができた。

(2) 基本層序

第3次調査で確認された基本層序は以下の通りである。アスファルト・道路造成に伴う碎石等の下には黒褐色粘質土が確認され、その下層には暗褐色粘質土、褐色粘質土が続き、疊が混じる黄褐色または明黄褐色粘質土となっている。基本層序は調査区上層断面図（第4図）で示す。

2 遺構

S D 1 調査区に沿うように検出されたなだらかに湾曲する溝である。幅40cm以上、深さは検出面より20~35cmの東西方向を軸とする。遺物は土師器小片にくわえて山茶楕の底部片が出土した。高台が多少きれいなこともあり、平安時代末~鎌倉時代であることが推察されたが、同じ溝から一片のみ薄い土師器鍋片が確認されており、異なる時代の遺物が混在

しているため、時期決定は難しい。

S D 2 S D 1と同様、調査区を沿うように検出されたなだらかに湾曲する溝である。幅60cm以上、深さは検出面より20cm程度で東西方向を軸とする。遺物は土師器小片が2点出土したのみで、形成時期の判断は難しく、その性格も不明である。

S D 3・S D 4 調査区の中央付近で、S D 2に対して直交するような南北方向の直線的な溝である。

S D 3は幅30cm、深さ60cm、S D 4は幅110cm、深さ60cmである。どちらの溝からも厚みのある土師器皿の小片や土師器鍋の小片が確認された。形成時期は平安時代末~鎌倉時代にかけてとみられる。

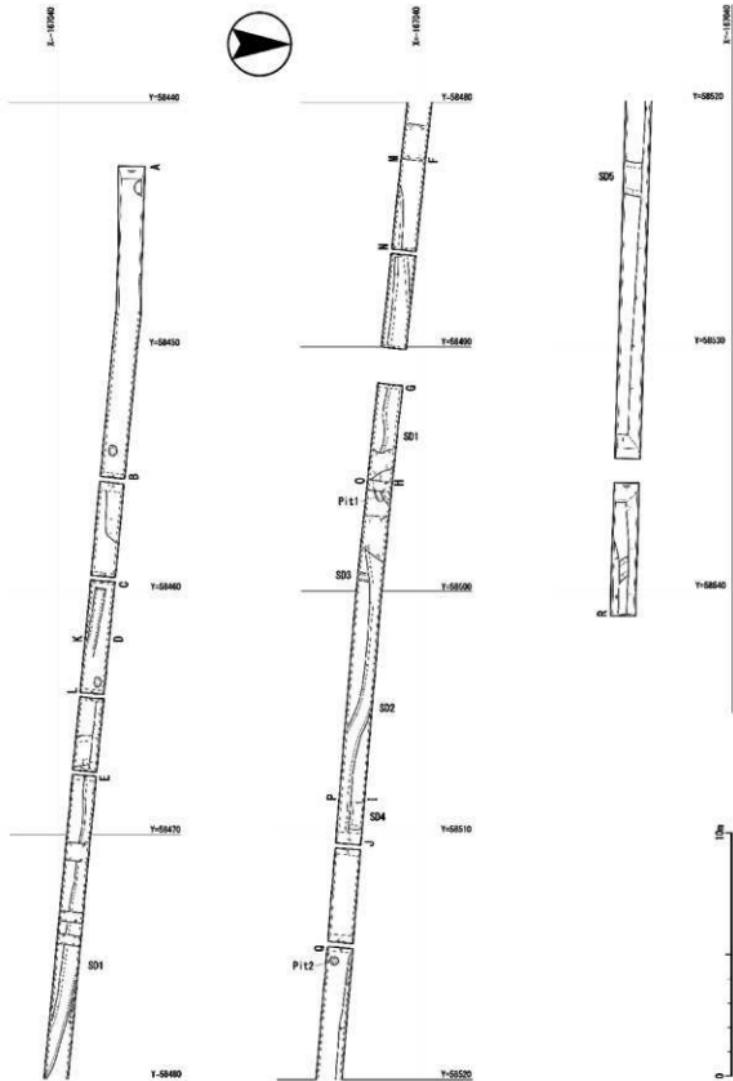
S D 5 調査区の東側で確認された、南北方向を軸とする、幅120cm、深さ40cmの溝である。溝の底から弥生時代中期後葉から後期とみられる壺の底部が出土した。さらに、近接した場所から壺の体部以下が完存する壺も出土している。これらのことから、形成時代は弥生時代中期後葉から後期と考えられる。検出当初は方形周溝壺の一部ではないかと予想したが、溝の立ち上がりは東西で特に急緩の差はなかつた。

Pit 1 調査区の中央付近で確認されたS D 1に切られる。幅40cm以上、深さ20cmのピットである。出土した土師器片より、平安時代末~鎌倉時代と考えられる。

Pit 2 調査区の東側で確認された、幅20cm、深さ20cmのピットである。遺物として厚みのある土師器片を確認した。形成時期は平安時代末~鎌倉時代と考えられる。

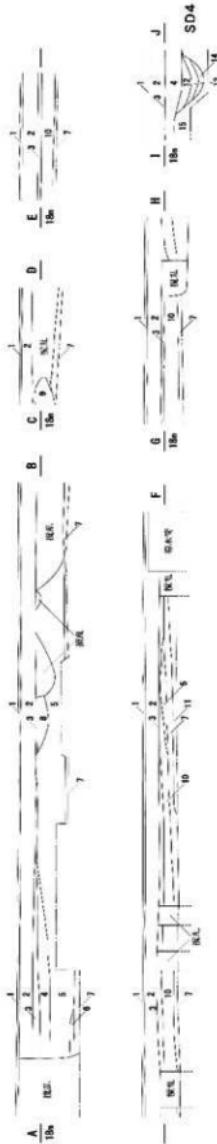
遺構名	形態	時期	調査次数	グリッド	長さ・長軸(m)	幅・短軸(m)	深さ(m)	備考
S D 1	溝	時期決定困難	立会	1 区	25.0~	0.4	0.2~0.35	
S D 2	溝	時期決定困難	立会	1 区	11.4~	0.6	0.2	
S D 3	溝	平安時代末~鎌倉	立会	1 区	0.4~	0.3	0.6	
S D 4	溝	平安時代末~鎌倉	立会	1 区	0.4~	1.1	0.6	
S D 5	溝	弥生時代中期後葉~後期	立会	1 区	0.6~	1.2	0.4	
Pit 1	小穴	平安時代末~鎌倉	立会	1 区	—	0.4	0.2	
Pit 2	小穴	平安時代末~鎌倉	立会	1 区	—	0.2	0.2	

第1表 遺構一覧表

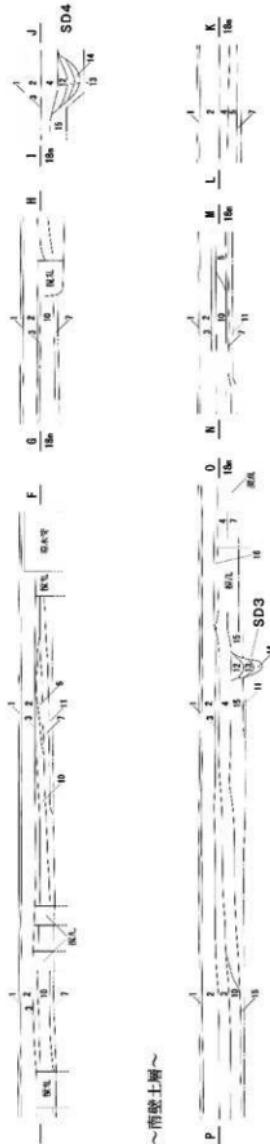


第3図 調査区平面図 (1 : 200)

～北端土壁～



～南壁土壁～



1. アスファルト
2. 砂利25ミリ以上粒度
3. 10mS/1 黄褐色粘質土
4. 10mS/2/1 黄褐色粘質土
5. 10mS/4 黄褐色砂質土
6. 10mS/4 黄褐色砂質土
7. 10mS/8 黄褐色粘質土
8. 10mS/1 黄褐色粘質土
9. 7.3mS/1 黑色粘質土
10. 10mS/3 前堤地帶上
11. 10mS/8 黄褐色粘質土多く含む
12. 2.3mS/1 黄褐色粘質土
13. 2.3mS/1 黄褐色砂質土
14. 2.3mS/1 黄褐色砂質土
15. 10mS/8 黄褐色粘質土
16. コンクリート (被覆下の土)
17. 10mS/2 黄褐色粘質土 (確認じる)

第4図 調査区土層断面図 (1:100)

IV 遺 物

第3次調査において出土した遺物は、総重量 1.8 kgである。以下では、遺構単位で記述するが個々の詳細については出土遺物観察表（第2表）を参照されたい。

S D 1 出土遺物（1） 山茶碗の底部片である。内外面ともにロクロナデによって調整されており、底部から体部への立ち上がりは丸みがあり、高台は台形を呈する。モミガラ痕が認められ、形状から12世紀前半のものと考えられる。

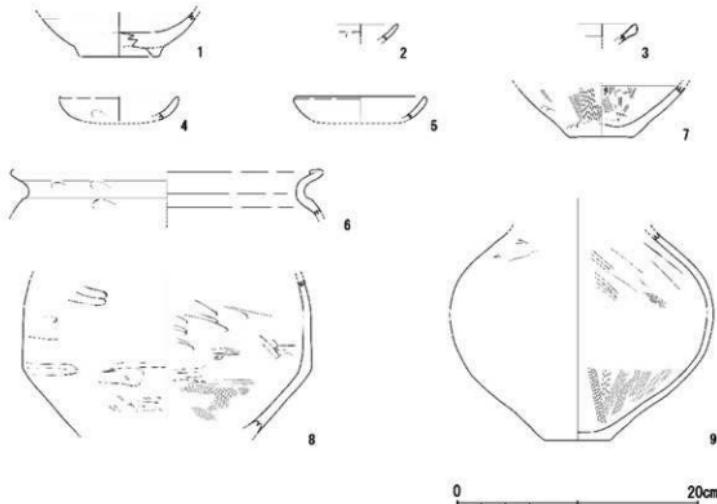
S D 3 出土遺物（2、6） 2は土師器の皿である。内外面ともにナデが施されており、外面にはユビオサエの痕跡も残る。6は土師器壺の口縁部である。口径26.0cm、頸部径22.8cm、口縁端部は内側に折り返されて肥厚する。頸部外面にはユビオサエの痕跡が強く残る。平安時代末～鎌倉時代のものと考えられる。

S D 4 出土遺物（4、5） ともに土師器皿である。

4は口径10.0cm内面はナデ、外面はナデとユビオサエにより調整されている。5は口径が11.0cmである。内面はヨコナデが施されているものの、外面は磨滅が著しいため、調整が不明確である。どちらも平安時代末～鎌倉時代のものと考えられる。

S D 5 出土遺物（7～9） 7は弥生土器壺の底部である。底部径5.4cm、内面はハケ、外面はハケ及び工具ナデにより調整されている。8は弥生土器壺の体部である。体下半部に最大径があり、張りをもつて屈曲する。体部径は22.0cmである。ともに弥生時代中期後葉～後期のものと考えられる。9は弥生土器壺である。胴部中央が丸く膨らむ。底部径5.4cm、体部径は22.0cmで、磨滅が激しく調整が不明瞭であるが、弥生時代後期頃のものと考えられる。

包含層出土遺物（3） 白磁碗の口縁部と考えられる。玉縁の様子から、平安時代末～鎌倉時代のものと思われる。



第5図 出土遺物実測図（1:4）

第2表 出土遺物観察表

番号	実測番号	種類 器種等	地区	出土位置	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	特記事項
1	001-01	山茶碗	I区	SD 1 (高台)7.0	内：ヨリナリ 外：ヨリナリ+貼付ナリ	密 良	灰黄色	2.5Y7/2	底部4/12	セミガラスあり	
2	001-02	土師器 盆	I区	SD 3	内：ナリ 外：ナリ+貼付ナリ	密 良	明黄褐色	10Y8/7.6	口縁部小片	断面のみ実測	
3	001-05	白磁 梅	I区	包含層	ヨリナリ	密 良	輪：灰白	5Y8/1	口縁部小片	断面のみ実測	
4	001-04	土師器 盆	I区	SD 4 (口)10.0	内：ナリ 外：ナリ+貼付ナリ	密 良	にぶい黄褐色	10Y8/7.4	口縁部1/12		
5	002-01	土師器 盆	I区	SD 4 (口)11.0	内：ヨリナリ 外：擦痕のため不明瞭	密 良	橙	7.5Y8/6.6	口縁部2/12		
6	001-03	土師器 壺	I区	SD 3 (口)26.0 (底)22.8	内：ヨリナリ 外：ヨリナリ	密 良	明黄褐色	10Y8/7.6	口縁部2/12		
7	002-02	弥生土器 壺	I区	SD 5 (底)5.4	内：ナリ 外：ナリ+工具印	密 良	内：にぶい橙 外：黄褐色	5Y8/6.4 2.5Y5/3	底部完存	弥生時代中期後葉	
8	002-03	弥生土器 壺	I区	SD 5 (体)22.0	工具印+ハサエ印	密 良	内：灰黄褐色 外：暗褐色	10Y8/5.2 2.5Y6/2	体部片	弥生時代中期後葉	
9	003-01	弥生土器 壺	I区	SD 5 (底)5.4 (体)22.0	内：ナリナリ+ナリ 外：擦痕のため不明瞭	密 良	内：黒褐色 外：橙	10Y8/3.1 7.5Y6/6	体部以下 完存	弥生時代後期	

出土遺物観察表は、以下の要領で記載している。

実測番号………実測段階の登録番号である。

種類、器種………「山茶碗」「土師器」などの区分や「盆」「壺」などの区分を表す。

出土位置………遺物の出土した構造などを記す。

法量(cm)………遺物の大きさを示す。(口)は口縁部径、(底)は底部径、(高台)は高台部径、(体)は体部径。

(頸)は頸部径を示す。なお数値はそれぞれの部位の最大値であり、内法や実測段階での接地点ではない。

調整・技法の特徴………主な特徴を示す。「A→B」は口縁部径、(底)は底部径、(高台)は高台部径、(体)は体部径。

(頸)は頸部径を示す。なお数値はそれぞれの部位の最大値であり、内法や実測段階での接地点ではない。

胎土………小石などの混和材を含む素地の密着を「密～粗」で区分した。

色調………その遺物の代表となる色調を記載した。表記は『新版標準土色帖』による。

残存度………その部位を12分割した際の残存度を示した。

V 結語

1 遺跡の状況

寺田遺跡は、神積平野に分布しており、かつて周辺では本調査が実施されている。寺田遺跡からほど近い田丸道遺跡で南北方向の大構が確認され、水利施設（堰）も検出された。また古墳周溝も確認されており、古墳時代から古代にかけての人々の生活が明らかとなっている¹⁾。

今回の調査は、狹小な範囲であったが、SD 5から弥生時代中期後葉から後期の土器が出土したことにより、寺田遺跡がある微高地にも、弥生時代の集落の存在が明らかになった。

玉城町内の弥生時代の遺跡には、西方の仲垣内遺跡（野篠）や上ノ山遺跡（勝田）などがあり、後者からは堅穴住居から前期新段階の壺と甕が出土している。後期後半の小社遺跡（小社曾根）では、22基もの堅穴住居が確認され、貯蔵穴や中央炉も発見されている。

また、溝やピットが認められたことで平安時代か

ら鎌倉時代にかけての集落の存在も想定される。

2 弥生土器について

これまでの当遺跡での調査においても、弥生土器が出土していたが、今回、SD 5から出土した弥生土器壺2点は溝の底から近接して出土した。このうち8は口縁部を欠くが、重心を体下部におき、強く屈曲する形状から東海地方の同時期の土器と共通性を持っている²⁾。

今後の当遺跡および周辺の発掘調査にも注視していきたい。

【註】

1) 三重県埋蔵文化センター『平成24年度県営農業基盤整備事業地域（伊勢宮内）埋蔵文化財調査報告 田丸道遺跡（第3次）有田地区出土土器・土壤自然化学分析』2014

2) 加納俊介・石黒立人編『弥生土器の様式と編年』2002

【参考文献】

- ・三重県『三重県史 資料編 古代1』第3章 弥生時代 2005.9
- ・玉城町『玉城町史 上巻』第2編 第1章 考古 1995



調査前風景（西から）



工事立会状況（西から）



SD 1 (西から)



SD 3 (北から)



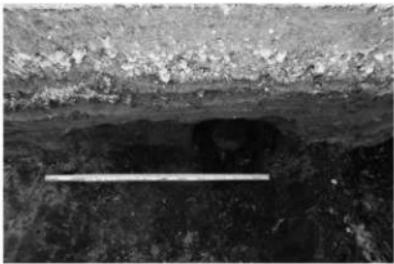
SD 4 (南から)



SD 5 (北から)



SD 5 遺物出土状況 1 (西から)



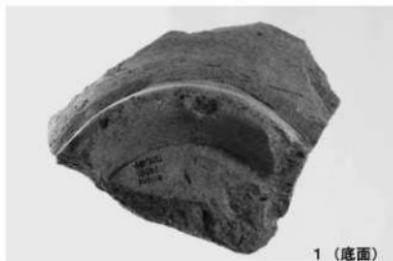
SD 5 遺物出土状況 2 (北から)



Pit 1 (東から)



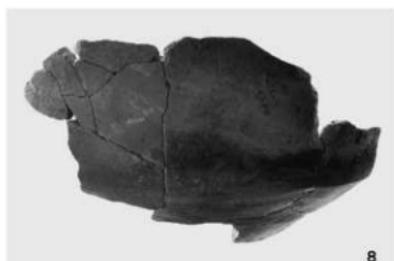
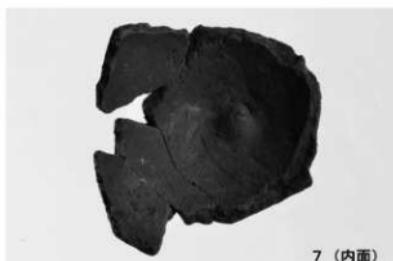
Pit 2 (西から)



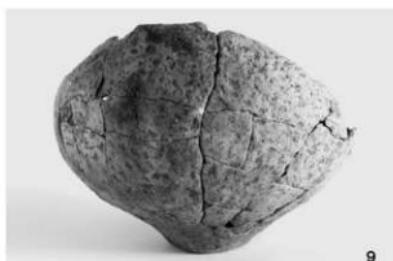
7



6



8



9

報告書抄録

ふりがな	てらだいせき（だいさんじ）はくつちょうさほうこく							
書名	寺田遺跡（第3次）発掘調査報告							
副書名								
卷次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	389							
編著者名	倉野雅文							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325	三重県多気郡明和町竹川503			TEL	0596-52-1732		
発行年月日	2020(令和2)年8月1日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
寺田遺跡	伊勢国玉城町佐田	24461	425	34度 29分 40～ 45秒	136度 37分 55～ 59秒	20181112 ～ 20181116 (第3次)	98.4m ²	平成30年度 田丸地区県営 かんがい排水 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
寺田遺跡	散布地	弥生 平安 鎌倉	溝・柱穴		弥生土器 土師器 山茶碗			
要約	寺田遺跡は、玉城町の南東部の集落縁辺部及び水田に広がる遺跡で、標高は17m前後である。今回の調査区は遺跡南東端部にあたり弥生時代及び平安時代末から鎌倉時代にかけての遺構遺物を確認した。主な遺構は溝で弥生時代中期後葉から後期の壺が底付近で検出された。他に4条の溝を確認しているが、概ね平安時代から鎌倉時代までの土師器壺、鍋が検出された。調査区が幅狭い箇所であるため、遺構全体の性格は不明である。							

三重県埋蔵文化財調査報告 389

寺田遺跡（第3次）発掘調査報告
～度会郡玉城町佐田～

2020(令和2)年8月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印 刷 共立印刷株式会社

